２－２－９）

大谷いのちをつなぐ田んぼプロジェクト

小野寺雅之

地方の現状にもれず、当地（大谷・気仙沼市）においても、人口の減少、少子高齢化、衰退する一次産業など地域の社会や経済が疲弊し、恵まれた自然を有しながら手入れもされずに放置されています。この状況に、「松枯れ」や「磯焼け」が追い打ちをかけるように発生しました。

この異変から大谷の自然を守ろうと子供たちが「ハチドリ計画」を始めました。２００４年のことです。その活動は、海（漁業）、山（林業）、田んぼ（農業）と地域の自然や農林水産業全般にわたり、幼稚園から小学校、中学校まで地域の子供たち全員が参加するという取り組みへと発展してきました。そして、この取り組みの中核となっているのが「ふゆみずたんぼ」です。

しかし、２０１１年３月１１日の大津波は、海岸から遠く離れた「ふゆみずたんぼ」も飲み込みました。田んぼの生き物たちが作り上げてきた肥沃なトロトロ層は剥ぎとられ、津波が運んだ大量の漂着物や瓦礫で覆われてしまいました。

これまで続いてきた「ハチドリ計画」も断念せざるをえない状況でしたが、子供たちの「田んぼをやりたい」という声に押されて、田んぼの復興を開始。全国から１００人を超えるボランティアが集結して、漂着した家や車からガラスの破片にいたるまで取り除き、例年通りの稲作が可能となりました。田植えや稲刈りなど子供たちが総出で作業し、豊作となったのです。

「ハチドリ計画」は今年で１０年になります。これだけ長く継続し、広範な活動を積み重ねているのは、教員だけではなく、保護者や地域住民に「地域を元気にしたい」「地域の子供は地域で育てたい」という共通の思いが原動力となっているからです。

この共通した「思い」をどう結び付け、形にしていくか。１０年目を迎えて、新たな一歩を踏み出すために「いのちをつなぐ田んぼプロジェクト」を立ち上げました。

このハチドリ計画に最初に取り組んだ子供たちも、今や社会人として巣立つ年頃になりました。ハチドリ計画に取り組んだ子供たちの多くは地元での暮らしを望んでいますが、残念ながら、彼らを受け入れる仕組みがありません。

「いのちをつなぐ田んぼプロジェクト」は、いわば「ハチドリ計画」の発展形として、「ハチドリ計画」の卒業生たちが地域の豊かな自然と共生し、暮らしが立つような仕組みづくりを目指すプロジェクトなのです。